

5-7

主題 「きもちがええよ」～トイレでの大切な排泄～

排泄

副題 排泄を支援する

認知症ケア

研究期間 6ヶ月

事業所 至誠特別養護老人ホーム

発表者：前崎衣美 池端亨

アドバイザー：

共同研究者：柏木誉史 福嶋孝子

電 話 042-527-0061

メール nishiki-tokuyo@shisei.or.jp

FAX 042-527-0032

URL http://www.shisei.or.jp/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

至誠ホームは高齢者総合福祉施設として、昭和26年に養護老人ホームを開設以来半世紀以上にわたり立川の地において高齢者福祉を担い、その時代や地域のニーズに応じた事業を先駆的に展開してきました。至誠特別養護老人ホームは昭和52年に開設し、現在146名の高齢者が4フロアで生活されています。

《研究前の状況と課題》

現在、日中はほとんどの利用者に対してトイレ介助を行っている。しかし、排泄のタイミングは一人一人違うため、現在行っている定時の誘導や随時のトイレ誘導だけでは、パット内にすでに排泄してしまっていることが多く、また、尿意・便意から何かしらのアクションやサインが出ていても、それが「トイレに行きたい」という訴えなのか十分汲み取れていない現状がありました。

また、これまでの排泄チェック表は、便秘対応を目的として、便が出た時のみチェックをしており、排尿に伴う表の活用はほとんどされていませんでした。

《研究の目標と期待する成果》

パット内ではなくトイレで排尿・排便ができる確率を「トイレ率」と称し、トイレ率がアップすることを期待し、定時のトイレ誘導に加え、新たな排泄表を基に個別的に排泄パターンを把握しその人にあったトイレ誘導を実施した。

《具体的な取り組みの内容》

パット内ではなくトイレで排尿・排便ができる確率を「トイレ率」と称しトイレ率のアップを目標に取り組みを行いました。

①疑似体験

利用者の気持ちを知ることから始めようと、実際に職員がオムツをあて排尿の体験をしました。

②排泄表の改善

排便と排尿で排泄表が分かれていたが、1つの表に統一し「いつ・だれが・どこで」排泄したか排泄状況が分かるようにしました。

③データ分析

排泄表をデータ化し利用者個別の排泄パターンを調べました。

④排泄パターンにあわせたトイレ誘導

データに基づき排泄があるタイミングに合わせてトイレ誘導を行いました。

《取り組みの結果と評価》

「トイレ率のアップ」という目標は達成できました。排泄リズムを見直し、時間帯に着目しトイレ誘導を行う個別ケアに取り組んだ結果、失禁が減少し、24時間全体のトイレ率が向上しました。

◎取り組みの結果

＜A氏のトイレ率＞

54.7% ⇒64.5%

＜B氏のトイレ率＞

27.6% ⇒50.0%

◎今後の課題

- ・更なる1人1人の排泄パターンの構築、トイレ率のアップ
- ・コストの見直し
- ・水分摂取量・食事摂取量・運動、の改善から自然排便を目指す。

《まとめ》

1日の業務の中で、排泄介助に多くの時間をかけています。しかし、例えば「パット交換」は排泄の“後始末”をすることなので、後始末に追われる仕事をしてしまっているということになります。認知症の方だからこそ、「排泄はトイレです」という当たり前の生活を目指し、本当の意味で「排泄を支援する」ケアをしていきたいと考えます。

《提案と発信》

（重要）現在の福祉業界は、現場からの発信力が試されています。貴事業所の取り組みを、広く他の事業所にも紹介し、福祉業界全体のレベルアップに繋げることができたら、大変意味のある発表になります。研究を通して、福祉業界への提案、他の事業所への呼びかけ等、貴事業所からの情報発信をご記入下さい。

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。